

読売俳壇

矢島 渚男 選

借景に大和三山大根干す

東大阪市 土屋 鉄男

【評】干し大根越しに奈良盆地を見渡せ、香久山・畝傍山・耳成山が見える所だ。古代の歴史の興亡も万葉の歌なども浮かんでくる。運動会戦さ最中の国旗あり

宝塚市 広田 祝世

【評】運動会には平和な万国旗。しかし、今はその中に記憶に新しい国旗が混じっている。戦場になっていく国々だ。なんで人間は戦争ばかりしているのだろうか。

秋の蝶それでも風の来る方へ

大月市 米山 明博

【評】弱弱しい秋の蝶だなど見ていくと、やがて風の吹いてくる方へ向かって飛んでいった。かすかに花の匂いを感じたのだろうか。夜爪切り深爪となる神の留守

高槻市 村松 謙

秋の風平城京跡木のベンチ

木津川市 永岡 操子

思い出に脚色をして日向ぼし

京都市 根来美知代

ハローウィン時に狂ってみた〜あり

大阪市 出利葉 孝

秋深し片想いには慣れぬもの

東京都 関根ともみ

外に出て郵便待ちは雁渡る

盛岡市 久保 直

下り坂に背中照らされ秋の暮

君津市 佐藤 鮎美

宇多喜代子 選

だしぬけに風の湧きけり霧の中

東京都 杉中 元敏

【評】あたりの見えない霧の中に立っていて風が突然吹いてきたのだがその風を湧くと表現した句。予測していないものとの出会いである。老眼鏡掛けて外してそぞろ寒

白井市 毘舎利道弘

【評】高齢者に共感を抱かせた句だ。何をしても眼鏡をかけた外し外し。ときに置き所を忘れたり。「そぞろ寒」がまことにぴったりである。鳥海山も月山も見ゆ冬支度

酒田市 兵田 一子

【評】鳥海山も月山もよく知られた名山である。この山が見えるところにお住まいとは羨ましい限り。いつも見ている山が暮らしたの指針となっている。幼な子の纏まり立ちや冬青空

横濱市 岡 まゆみ

秋出水鳥の祭りの人まばら

袖ヶ浦市 浜野まこと

靴には葉袋ばかり十二月

加古川市 東田 強

七五三姉はやさしく妹と

岐阜市 鈴木 隆

どこからか子のはしゃぐ声十三夜

熊谷市 小林 幸子

魚売る潮焼け声や十二月

佐野市 村野 則高

旅終へて煮豆ふつふつ初しぐれ

深谷市 大橋 松枝

正木ゆう子 選

鷹渡る岬の果ての危草

横浜市 小野寺 洋

【評】危草とは崖などの危険な場所に生えている草。岬の突端から海上へ去りゆく鷹をよく見るために、草を踏みしめているのだろう。危草という古風な言葉が効果的である。小鳥来るとても小さな精米器

土浦市 小川 智昭

【評】家庭用の小さな精米機と小鳥を取合わせたのだが、二つの小の字と、「とても」が愛らしく、世界の片隅の小さな平和が描かれた。君たちに秋思あるのか涼鳥よ

東京都 佐藤 ゆう

【評】命あるものの尊さは平等ではあるけれど、朝夕の椋鳥の群のすさまじさにはちよっと。閉口するところか、感心するところか。秋惜しむ消化試合の人生と

前橋市 山本 亨

サクサクのパイのズッシリ林檎かな

松原市 古沢 昌代

骨黒き烏骨鶏とや秋の風

藤岡市 飯島加津枝

地を這へば蝶も地を舞ふ乱れ萩

東京都 望月 清彦

息継ぎもできないくらい金木犀

茨城県 笠原 真枝

十階にふと木犀の香りかな

寝屋川市 川上 純一

木犀のちる金十字銀十字

足利市 長 芳男

小澤 實 選

小春日や巻爪はニッパで切る

静岡市 山本 正幸

【評】ふつうの爪切りでは切りにくい巻爪であっても、ニッパ型爪切りならば容易に切ることができ。小春に恵まれた、休日の午後であろうか。やりとげた感あり。常温の酒とおでんとそれです

所沢市 仲村 一郎

【評】ひとりの晩酌には、特別なものはいらない。日本酒は冷やさなくても、あたたかなくてもいい。肴はおでんをあたたかめるだけでいい。滾る湯に袋の蝗がまけし

東京都 天地わたる

【評】田で捕ってきた蝗が、布袋いっばいにある。その蝗を茹でようとしているのだ。「おぢまけし」はかなりの量であることが知られる。秋晴や鳥居は異界への戸口

青梅市 松野 英昌

行く秋やゲラタン皿に残る焦

福山市 松崎 映子

あつあつの大根のどろを通りけり

守谷市 久保田洋二

名画座の手描きポスターそぞろ寒

日上市 菊池 三夫

金網に軍手並ぶや秋日和

東京都 伊藤 直司

味噌揚げや軒減りし隣組

川崎市 関 直彦

山霧の降り込む谷の深きかな

神戸市 岸下 庄二

枝しおり 折

加藤耕子句集『自然』 国際俳句協会などで精力的に活動する俳人の第9句集。自然への畏怖と優しいまなざしがにじむ。八竹落葉舞ひつづ 仏性ががやかす

(KADOKAWA、2970円)

山階基歌集『夜を着たなつら』 日々の日常を軽やかに描く新進気鋭の第2歌集。生きるこの明暗が深くなる。へいぢぢりピアスは耳を突き抜ける別の星から呼ばれるように(短歌研究社、2200円)

大辻隆弘著『岡井隆の百首』 歌人入門シリーズの9冊目は、前衛短歌運動の旗手として活躍した歌人の岡井隆(1928〜2020年)を取り上げる。岡井に師事した著者は「現実を感覚的にとらえる写実の眼」と「現実をかすかに遊離する甘美な調べ」の力が岡井にあったと指摘する。△苦しみもよろこびもふりをすただけた傘のなだれてゐた霧生駅(ふらんす堂、1870円)



題字デザイン・イラスト 福田美蘭